

徳田秋聲「あらくれ」と「奔流」をつなぐもの

——民俗学・資本・女性——

大木 志門

一 「あらくれ」と「奔流」研究の現在

徳田秋聲「あらくれ」(一九一五〔大正四〕年一月二日〜七月二四日『読売新聞』)は、かつては作中人物のモデルや自然主義リアリズムの問題、その特異な叙法や夏目漱石が評した「フィロソフィーがない」(『文壇のこのごろ』一九一五年一〇月一日『大阪朝日新聞』)という評との関わりなどから主に研究がなされてきた。しかし近年では、作中に実は現れていながら女性主人公のお島には「見えていない」こととの関わりから研究される傾向が見られる。つまり、お島が生きている作中時間の社会的諸文脈とともに作品を読み解く方法である。特に当時の女性観との関わりが問題になっており、たとえば「新しい女」言説との距離から行動的なお島像を解釈する松本徹『西洋化』の中の『あらくれ』——大正前期の徳田秋聲——(二〇〇四年三月『武蔵野大学文学部紀要』)、のち『徳田秋聲の時代』収録、二〇一八年、鼎書房)や、明治の女性の身体性と職業観から論じた藪楨子「『あらくれ』論

——お島を軸に」(一九九五年一月『藤女子大学国文学雑誌』)、および渡邊澄子「『あらくれ』論——お島を視座として」(一九九七年三月『大東文化大学紀要(人文科学)』)、さらにそれを掲載紙の大正期の労働婦人像から再考した内藤寿子「『あらくれ』論——「よみうり婦人付録」を補助線に」(一九九九年五月『文芸と批評』)、女性の労働を扱う秋聲作品の系譜を論じた倉持亜希子「『あらくれ』への道——女性／労働／搾取／自立」(二〇一〇年三月『学習院大学国語国文学会誌』)、作中の描写を近代日本の「帝国主義」との関わりから再考する内藤千珠子「帝国の養女——『あらくれ』のジェンダー構造」(二〇〇八年三月『大妻国文』)、のち『愛国的無関心——「見えない他者」と物語の暴力』収録、二〇一五年、新曜社)、作中に表現された労働や相続の意味を同時代的に検証した太田水穂「身上・女・商売——『あらくれ』の経済」(内田道雄・大井田義彰編『文学のこゝろことばⅡ』、二〇〇〇年、『論集 文学のこゝろことば』刊行会)、同様に本作を「相続」の物語として読みつつ「越境的」なお島像を提示した関谷由

美子「異邦の身体」の作り方―『あらくれ』の〈語り〉（二〇二二年三月『人文科学』）などの論である。

本作は一九〇八（明治四一）年の「新世帯」以降の秋聲自然主義文学の集大成という作品評価に比して「本格的に論じられることの少ない作品であった」（前掲渡邊澄子論）が、これらの論考によって作品の解像度が飛躍的に上がったことは疑いない。なお、これらアカデミズムにおける探究と平行して、作中に秋聲文学には珍しい複数の伝統的な物語の痕跡を見だしその意味を探索する大杉重男「『あらくれ』論」（群像新人文賞評論部門受賞作、一九九三年六月「群像」、のち「畏怖と安易」あらくれ）として『小説家の起源』収録、二〇〇〇年、講談社）があり、さらに大塚英志が『怪談前後 柳田民俗学と自然主義』（角川書店、二〇〇七年）で大杉論を引きながら本作の民俗学的要素に言及しているが、この問題については前掲の内藤千珠子論や関谷由美子論が部分的に触れている以外ほとんど言及されないままであった。しかし、お島の労働や家の相続の問題と作中の民俗学的要素の問題は、後述するが大杉が再三言及するように実は同一の問題系にあるものであり、併せて検証される必要があるだろう。本稿の前半では、この研究史的状况から見えてくる「あらくれ」の持つ現在的可能性をまず提示することにする。

これに対して「あらくれ」の直後に連載され、本作の姉妹篇的な性格を持つ「奔流」（一九一五年九月二六日～翌年一月一四日『東京朝日新聞』）については、今までほとんど正面から作品研究がなされていない。論中で触れる『徳田秋聲全集 第一一巻』

（一九九八年、八木書店）の解説として書かれた日高昭二「浮上する身体」（のち『重ね書きする／される彼ら 大正文学論集』収録、二〇二二年、翰林書房）以外に単独の作品論は存在せず、秋聲長篇の代表作の一つに名前が挙げられることも多い作品としては極めて寂しい状況なのだ。ところで大杉重男は前掲論とは別に秋聲の新聞小説について興味深い整理を行っている。秋聲の明治三十年代後半から大正初年代の代表的長篇は当時の三つの主要新聞に二作品ずつ掲載されており、まず編集者に高浜虚子がいた『国民新聞』掲載の「新世帯」（一九〇八年）と「爛」（一九一三年）はいずれも「三人暮らし」が主題で、同じく正宗白鳥がいた『読売新聞』掲載の「足迹」（一九一〇年）と「あらくれ」（一九一五年）は「女を書く物語」という共通点があるとする。だとすれば夏目漱石によって依頼された『東京朝日新聞』掲載の「黴」（一九一二年）と「奔流」（一九一五年）は連続性を有するはずであるが、実際にはそうなっていない。これは次節で紹介するように秋聲の腹案に漱石が難色を示したために作品のプランが曲げられた可能性があるからで、大杉は「奔流」が「秋聲にとっても漱石にとっても妥協の産物だったかもしれない」と書いている²。

本作が秋聲だけでなく依頼者の漱石にとっても「妥協」であるとは、漱石が秋聲に「黴」の続篇を望んでいた形跡があるからだが、ここで気になるのは「奔流」が本当に秋聲にとって「妥協の産物」であったかである。先回りして述べれば、秋聲はもしかすると題材については「妥協」したのかもしれないが、その主題については必ずしも妥協しなかったのではないか。たしかに本作

「奔流」は同時代においても後世においても充分な評価がなされなかったが、あらためて読み直してみると秋聲の創作意図が顕著に表れた意欲的な作品であることがわかる。前述のように「あらくれ」と「奔流」は姉妹篇的な性格が強く、また両作にはこの時期の秋聲が持っていた社会とそこで生きる人間、特に女性についての認識が強く表れている。よって本稿の後半では、掲載紙をまたいだ「あらくれ」と「奔流」の連続性を重視し、「あらくれ」を梶子にしながら、これまでほぼ問題とされてこなかった「奔流」を秋聲の作品史の中に位置づけてみたい。また、その作業を通して大正前期の秋聲の問題意識を明らかにすることが本稿の試みである。

二 「奔流」と編集者・漱石

これは既に明らかになっていることではあるが、まずは「奔流」掲載までの経緯を確認しておきたい。夏目漱石は一九一五（大正四）年八月九日付の書簡で、朝日新聞での連載小説に「娼妓の一代記」を書きたいと申し出たらしい秋聲に対し、「社の方では御存じの通りの穩健主義」で「あまり歓迎しない」と牽制を行った上で、「然したとひ娼妓だつて芸者だつて人間ですから人間として意味のある叙述をするならば却つて華族や上流を種にして下劣な事を書くより立派だらうと考へますので（中略）もしあなたが社の方針やら一般俗社界に対する信用の上に立つ營業機關であるといふ事を御承知の上筆を執つて下されば差支なからうという事になりました」と書き送った。もともとこの時の交渉は秋

聲の遠縁で漱石門下の劇作家・岡栄一郎を仲立ちに進んでいたようだが、栄一郎が無断で大阪に行き大阪朝日新聞に入社したために漱石自ら交渉の舞台に立ったのだ。すでに「徹」を『朝日新聞』に連載していたが、秋聲が漱石と実際に対面したのは生涯ただ一度であるらしく、高浜虚子の依頼で『国民新聞』に「新世帯」の連載を引き受けた直後、虚子に誘われて行った九段の夜能で漱石と出会って一緒に観劇をした体験を秋聲は印象深い出来事として書き残している。なお長谷川郁夫『編集者 漱石』（二〇一八年、新潮社）を読むと、漱石が「此次は有名な人の載せた」という朝日新聞の山本松之助の要望に応えて秋聲を推挙し、秋聲の原稿が遅延することを心配する山本を説得し、秋聲の言質まで取った上で連載にこぎ着けたことがわかる。朝日側は執筆候補に永井荷風を挙げており、一方で漱石の元には中村古峽や近松秋江らが執筆の売り込みをかけて来ている中で、漱石は秋聲を信頼して強く推したのだった。

漱石は先の書簡で「私は他人の意志を束縛して芸術上の作物を出してくれといふ馬鹿なこととはしたくありません」と述べ、「若し又社の所謂露骨な描写なしに娼妓の伝が何の窮屈なしに書けるなら無論それで結構だらう」（傍点は原文通り）し、また「私はそんな腕のある女の生涯などを知りません。又書かうと思つても書けません、人間を知るといふ上に於てさうした作物は私の参考になるんだから喜んで拝見したい」とまで書いている。しかしおそらく漱石の本意は、「万一」余程の程度に御趣向を御曲げにならなければ前申した女の一代記が書きにくい様なら『かび』の続篇

でも何でも外のものを御書きにならん事を希望致すのです」という方にあったであろう。もちろん朝日の文芸欄を預かる漱石からすれば当時の厳しい検閲に配慮して「娼妓の一代記」の内容を心配するのは当然のことであり、同紙の読者層に相応しい家庭を舞台にした小説を望んだということであろうが、しかし漱石の作家的関心としても「黴」の続篇への期待があったのではなからうか。漱石はよく知られているように「黴」を高く評価しており、「奔流」の直前に同紙に連載された自伝的性格の強い「道草」（大正四年六月―九月）はそれに対する漱石なりの回答であったともされる⁵。翌年未完の「明暗」（五月二六日―十二月一日『朝日新聞』）を遺して逝去する漱石は、家庭を男女の我執の渦巻く場として考えそれをモチーフに新聞小説を書き続けていたからである。その意味で「明暗」は秋聲に期待して叶わなかった主題を自ら作品化したものと言えるかもしれないが、そのような漱石の秋波を受けて書かれた「奔流」は、作家自身の家庭でこそないが実業家の男性の家庭を舞台にしており、この意味で漱石の希望にに応じた側面がないとはいえない。

そして実際に秋聲は当初の「娼妓の一代記」の執筆は諦めたと考えられている。「奔流」の女性主人公である照子はたしかに娼妓だった時代があるが、それは十六歳の僅かな一時期だけで、作中に描かれるほとんどの時間を「富有者」の岩辻の「囲い者」として生きているからである。「伝へ聞くところによれば、都下の某代議士の愛妾であつた一美人をモデルにした」とされることからも、もともと想定していたモデルから変更された可能性が高

い。当初想定していたモデルが誰かは断定できないが、短篇「北國産」（一九〇八年）のモデルになり、「黴」にも少し登場し、その後長篇「何処まで」（一九二〇年）の題材となり、また秋聲の双子の私生児を産んだとして「花が咲く」（一九二四年）「未解決のままに」（一九二五年）等に描かれる新潟県新発田出身の娼妓の女性の可能性はあるだろう⁷。「奔流」の照子の郷里が北國の都会とされているのはその残滓とも思われる。

ともあれ、「奔流」は朝日新聞「漱石の「穩健主義」に丸め込まれた作品ではなく、結果的により挑戦的な作品に仕上がったのではないか。前述のように本作の主人公は娼妓ではなく「囲われ者」へと姿を変え、花柳界ではなく実業家の家庭が舞台になっていく。また「あらくれ」に散見されたような「露骨な描写」もほとんど登場しないが、しかしそれは漱石が「却つて華族や上流を種にして下劣な事を書くより立派だらう」とした「上流」（正確には「奔流」の岩辻は成り上がり者だが）の家庭を極めて非倫理的に描いたとも言え、次第に本宅と妾宅の關係すら曖昧になってゆく物語は、漱石が読者として想定する「一般俗社界」の家庭観を揺り動かすのに充分なのである。

三 「あらくれ」の中の「民俗学」

以上のようにして連載開始された「奔流」の内容に入る前に、まずは「あらくれ」の問題を抽出することで議論の前提を作りたい。冒頭で述べたように、「あらくれ」は当時の女性の労働や経済の物語として解釈されることが近年の研究トレンドであつた

が、同時に大杉重男『『あらくれ』論』（前掲）が呈示したように、本作は「継子いじめ」「捨て子譚」や「身代わりの婿」や折口信夫的な「水の女」など秋聲には珍しい前近代的な様々な物語からの引用が看取される作品でもある。関谷由美子（前掲）もお島と養家の親族・作太郎との婚姻の場面に清代中国の物語『紅樓夢』との類似を見ている。その中で特にこれまで多く問題になってきたのが、お島の養家に伝わる「六部」（諸国霊場を巡礼する僧）にまつわる「全然作物語にでもありさうな事件」である。

或冬の夕暮に、放浪の旅に疲れた一人の六部が、そこへ一夜の宿を乞求めた。夜が明けてから、思ひがけない或幸ひが、この一家を見舞ふであらう由を言告げて立去つた其旅客の迹に、貴い多くの小判が、外に積んだ櫓のなか、ら、二三日たつて発見せられた。養父は大分たつてから、一つはその旅客の迹を追ふべく、一つは諸方の神仏に、自分の幸を感謝すべく、同じ巡礼の旅に上つたが、終にそれらしい人の姿にも出逢はなかつた。左に右、養家はそれから好い事ばかりが続いた。ちよい／＼町の人達へ金を貸つたりして、夫婦は財産の殖えるのを楽んだ。

（『あらくれ』一）

養父は「その六部が何者であつたかな」と「希に門辺へ来る六部などへ、厚く報謝をするをりなどに、その頃のことを想出して、お島に語聞せた」が、当のお島は「そんな事には格別の興味もなかつた」とされる。しかし、そのようなお島がこの話を深

く考えざるを得ない事態がやがてやってくる。学友から養家の過去について次のように聞いたからである。

然し時がたつに従つて、その時の事実の真相が少しず、お島の心に沁込むやうになつて来た。養家の旧を聞知つてゐる学校友達などから、ちよい／＼聞くとともにし聞齧つたところによると、六部はその晩急病のために其処で落命したのであつた。そして死んだ彼の懷ろに、小判の入つた重い財布があつた。それをそつくり養父母は自分の有にしてつたと云ふのであつた。お島は其の説の方に、より多く真実らしいところがあると考へたが、矢張り好い氣持がしなかつた。

（『あらくれ』三）

大杉重男（前掲）は江藤淳「徳田秋聲と『充実した感じ』」（『言葉と沈黙』一九九二年、文藝春秋）がこの「より多く真実らしい」学友の話を事実と見なし、六部が物語の登場人物ではなく「二度きりの人生で非業の死に遭つた極めて小説的な登場人物」とした見方を否定し、だとすればこの友人の話もまた一つの「物語」であり、「六部が病死したのではなく養父母によつて殺害された」可能性も含めむしろこちらが「異人殺し」の「フォークロア」に近いと述べる。これはその通りであり、ここでの「フォークロア」とは「六部殺し」と呼ばれる日本各地に伝わってきた民話・怪談であり、村に旅の六部がやって来である家に泊まると家の主人が六部を殺害して所持金を奪い、その金を元手に家は繁栄

するが、やがて生まれた子供が六部の生まれ変わりで過去の犯行を断罪する、というのが基本的な話型である。最後に子供が「こんな晩だったね」と語り出すことが多いため、通称「こんな晩」とも呼ばれてきた。

ただし怨霊信仰の専門家である酒向伸行「『こんな晩』と生まれ変わり譚―六部の転生信仰を中心として」（二〇一〇年六月『久里』）によれば、「六部殺し」と「こんな晩」は同根の物語だが若干の差異があるようだ。前者は「家や村の急激な盛衰を説明するために語り出された、あくまでも定住者側になった伝承であり、民俗社会に生じる異常や怪異の説明原理としての『異人殺し』伝承と同様のメカニズムの上に創出されたと考えられる」のに対して、後者の方は「諸国を放浪してまわる自分たちに危害を加えられないよう、定住者からの迫害から自らの身を守るために六部側から語り出された話」で「その際には六部が自らの始祖伝承や縁起として有していた転生信仰の影響を受け、本来、『六部殺し』の系譜を引いていたであろう語りを、生まれ変わり譚として再構成しなおして語ったと考えられる」からである。そしてこの話型は「さまざまな形で人間に訪れる苦楽・幸不幸を善因善果、悪因悪果の原理で説明する仏教的因果応報譚」であり、「六部殺し」では村の盛衰と結びつけて語られることもあるが「家の急激な盛衰を説明する話となっている事例の方が圧倒的に多い」とされる。秋聲「あらくれ」においては、家の住人が六部から継承した金銭の正当性を主張する話を語るのに対し、家の外の人間にとっては不当に取得した金銭という物語になっている点が、こ

のフオークロアをなぞっていることになる。

なお「こんな晩」の話型をより強く残して語り直された近代小説として知られるのが、夢の中で「私」が背負った子供に指示されて夜の中を歩く果てに「ちようどこんな晩だったな」「御前がおれを殺したのは今からちようど百年前だね」と告げられる、夏目漱石『夢十夜』（一九〇八年）の「第三夜」である。大塚英志は『怪談前後』（前掲書）で大杉論を参照しつつ、「あらくれ」と漱石「夢十夜」の第三夜を並べて論じている。そして「あらくれ」については「家の内と外の語りは、それぞれ異なる説話構造へ向かおうとして競い合」うことでどちらが「事実」とも言いがたいものとなっており、お島が「そのどちらにも加担しない」とで「作者が『お島』を取り巻く環境としてあるはずのフオークロアとしての説話を、まさにフオークロアとしてフオークロアの外部から記述し得ている」ことで「彼らはもはや『怪談』によって呪縛される世界観を生きていない」と評価した。⁹つまり「六部殺し」の物語が近代小説として成立しているということだ。

これに対し大杉は個人ブログ「批評時間」（二〇一九年六月二四日付「『資本の本源の蓄積』の神話と秋聲・漱石」¹⁰）において再論を行なった。

「六部殺し」の説話が語るのは。「なぜあの家は金持になったのか」という疑問に対する物語的な回答であると考えることが出来る。そしてその答えは、人に言えない後ろ暗いことをしたからというものである。極めて素朴であるが、同時に

明快な答えである。近代の初期に流通したこの物語は、マルクスの言えば日本における「資本の本源的蓄積」の神話と言える。資本が資本を生み出し労働者を搾取しながら自動的に増殖するためには、まず最初に原初的な資本がなければならぬ。その最初の資本はどうやって作られるのか。暴力的盗みによってというのが、日本の民俗社会の答えである。金持ちではなかった者が金持ちになるには、何か不当なことをすることなしには不可能である。これは成金に対する嫉妬、ルサンチマンの言葉であるのかもしれない。だがそれは実感に基づいた現実でもある。

漱石『夢十夜』の「第三夜」が示すのは「『相統』した者にかけられた呪いと罪の自意識と言うべきもの」で、「急速に発展する資本主義社会の中で『本源的蓄積』を『相統』したが故に先天的に勝ち組であること、そのやましさの文学的表現として漱石の『私』はある」と大杉は述べる。対して「『あらくれ』が示すのは、『相統』しなかった者、あるいは『相統』できなかった者の『現実』であり、「お島は洋服店を何度も開業し、精力的に働くことで経営は軌道に乗りかけたように見えるが、そのたびにちよつとした景気的气まぐれなどで、店を畳む。お島は商売にとりつくが、必要な『本源的蓄積』がないために繰り返し失敗する」としている。

ここでの漱石批判は興味深い⁸¹が本題から逸れるのでひとまず措くとして、この「六部の話」が貨幣経済の発展に関わる物語であ

ることは、大杉が依拠する小松和彦『悪霊論 異界からのメッセージ』（青土社、一九八九年）をはじめ一定の学問的定説となっているようだ。たとえば近世文学者の佐伯孝弘『風流三国志』の中の〈六部殺し〉（二〇〇二年十二月『日本文学』）は、宝永五（一七〇八）年刊の西沢一風作の浮世草子『風流三国志』の中に六部殺し譚の一種が見られることを紹介している。そして本作中に過去の同型の物語群より「金銭がより大きくクローズ・アップされていること」を、元禄年間以降に好況に陰りが見えることに加え「商品経済が農村にまで浸透したことから、農民層の階層分化が進むこと」で「同村内の人間同士が質取主と質入主に分け、同じ集落内で質地の収奪という事態がしばしば起こった」こと、そのような農村部の階層分化の結果として「上昇した者への嫉妬ややつかみが〈六部殺し〉〈こんな晩〉の昔話・世間咄を発生させる一因となった」と解説している。

なお小松和彦『悪霊論』では、「異人殺し」伝説は外部からやってきた貨幣経済によって共同体が解体される不安から語り出されたもので、「外部とつながっている貨幣とそれを持ち込む特定の家を差別し排除することで、旧来の村落共同体を守ろうとする」「『貨幣殺し』の物語であつたとされる。しかし実際にはそのような共同体の努力にもかかわらず、旧来の村落共同体は貨幣経済によってもれなく解体されてしまう。「それは村落共同体の内部と外部が融合してしまうことであり、具体的には都市社会のなかに組み込まれ吸収されてしまう」（『悪霊論』）からである。つまり「六部の話」は解体の危機を迎えた村落共同体の断末魔の叫

びのようなものなのだ。これを「資本の本源的蓄積」の神話となげて考えると、「資本の本源的蓄積」が行われる際には、共同体を広く含みこむ規模で資本を持つ者と持たざる者が分化し、その結果余剰労働力が産出されて都市労働力となることが必要である。つまり旧村落共同体が解体し、「労働者」が誕生する社会構造の変化ということである。ゆえに「あらくれ」のお島はまさに資本主義の発展に伴って都市に流出した無産者なのであり、物語の古層から多くの要素を汲み上げることと成立している「あらくれ」は、旧村落共同体が都市社会へと組み替えられてゆく時代を、お島という女性の身体を通して読者に体感させてゆくテクストと言えるのである。

四 「あらくれ」の「旧」と「資本」

なお大杉重男は前掲の二つの論考の間に講談社文芸文庫版『あらくれ』の解説「『旧』と『資本』の間で」（二〇〇六年、講談社）を発表しており、これが双方のテーマを繋ぐものとなっている。ここでキーワードとされているのが作中に頻出する「旧」と「資本」という言葉である。大杉によれば「あらくれ」の世界は「『資本』は「旧」からしか得ることのできないもの」であるが、お島は「旧」から「資本」を得ることを拒絶する存在であり、「お島はその本質において無成算＝無生産であり、近代的経営者とはなりえない」ゆえに「蕩尽」をするしかない存在なのである。この指摘は先の六部の問題ともつながっており、すなわちお島は養家という「旧」から「資本」を取らないことで、資本から

隔てられているということである。

この「旧」と「資本」の関係を、近代的な「相続」の問題として当時の法的な問題から解説したのが太田水穂「身上・女・商売」（前掲）である。『あらくれ』というテクストのほぼ全ての章にわたって経済的な表象を示す単語が含まれており、「お島を含む人間達が経済的な価値観によって世界を構造化し、行動を選択している」とする太田は、お島の実家と養家の「経済状況とファミリーアイデンティティの相剋」を問題にし、養父の水島はお島への「姉家督」を念頭に置いた上で自分たちの老後の面倒をみさせようと考えていたのが、一八九八（明治三十一）年に改正民法が施行されたことにより「嫡子相続・血族相続の觀念が前景化され」たことで、お島は「養女としての役目を終え」、もとは跡継ぎと考えられていなかった血族の作太郎を中心にした「（家）の創出の支えとして」お島を嫁がせ夫婦を「小作化」しようとしたのではないかと読み解く。以上の大杉・太田の問題意識を引き継ぎつつ本作をやはり「相続」をめぐる物語と読む関谷由美子（前掲）は、先述の養家に伝わる六部の話について、お島の感じた「心の傷」とは「殺された六部の〈損壊された命〉の比喩」であるとした上で、これをきっかけに養父母がお島を疎んずるようになったために相続が不可能になったと解釈し、そこからお島は「資本」を拒絶する存在ではなく、むしろ「資本」の側から拒絶された存在と見ている。さらに実母がなぜかお島を執拗に嫌い虐待することも「相続人嫌悪」に由来するとし、お島は「よそ者の眼差し」を持つ存在として相続から排除されているとするのであ

る。そこから関谷は、お島が相続から排除されたがゆえに、どこにも所属しえない「越境的」存在となったと読んでいる。

実際に本作にはこれら先行論で指摘される通りお島をめぐる家の「相続」が執拗に描かれており、また「旧」と「資本」という言葉が印象的に登場する作品でもある。たとえば養父の甥でお島が騙されて嫁がされる作太郎は「長いあひだ製紙の職工として、多くの女工と共に働かされたのみならず、野良仕事や養蚕にも始終苦使はれて来た」うえに、お島の養母のおとらから「おい、この忙しいのに寝てゐる奴があるかよ。旧を考えてみる」と罵られる存在である。おとらは養父にも「ちつと昔しを考へて見るが可いんだ。お前さんだつて好いことばかりもしてゐないだろう。旧を洗つてみた日には、余り大きな顔をして表を歩けた義理でもないぢやないか」と高圧的にふるまい、お島は「其声を洩聞くと、胸がどきりとするやう」になつて「直に六部のことを思出さずにはゐられなかつた」とあり、たしかに養家の相続の問題はその構成員の「旧」とつながっている。養父もまた「あの時王子の御父さんは、家へ帰つて来ると、島は隅田川へ流してしまつたと云つて御母さんに話したと云ふことは、お前も忘れちゃゐない筈だ」と言い「旧を忘れるくらゐな人間なら、駄目のこつた」と作太郎との結婚を嫌がるお島を諭す。また「養家の財産は、お島などの不断考へてゐるよりは、迥に大きい」ことを吹き込む西田の老人も「旧は矢張お島の養父から、資金の融通を仰いだ仲間の一人であつた」とされるのだ。

このように過去の出自を表す「旧」だが、それが単なる「家

柄」のことを言っているのではないことは、それと対比的に登場するのが同じ読み仮名を持つ「資本」であることからわかる。お島が兄に置き去りにされた山国の温泉地から戻り、缶詰屋の鶴さんとの破局後に一緒になる洋裁師の小野田は「洋服屋も好い商売だが、やつぱり資本がなくては駄目だよ。金の寝る商売だからね」とお島に話して聞かせ、それに感化されたお島もまた、小野田に文句を言われると「みんな店のためです。商売の資本になるんです」と、「惻巧ぶつて応へ」るようになるのである。次の引用箇所の「資本」にはルビこそ振られていないが、お島が最後に小野田と別れて一緒になろうとする職人・木村（モデルは秋聲の妻の弟・小沢武雄）の言葉である（傍点引用者、以下同）。

「私や早晚洋服屋つて商売は駄目になると思ふね。羅紗屋と裁縫師、その間に洋服屋なんて云ふ商人とも職工ともつかぬ、不思議な商売の成立を許さない時期が、今にきつと来ると思ひますね」

職人は興奮したやうな調子で言つた。

「如何してさ」お島は目元に笑つて、

「この人はまた妙なことを言出したよ」

「だつて然うでせう」職人は誰にもそれが解らないのが不思議のやうに熱心に、「だからお客は莫迦に高いものを着せられて、職人はお店のために働くといふことになる。その癖洋服屋は資本が寝ますから、小さい店は迎も成立つて行きやしませんや。これは如何したつて、お客が直接地を買つて、裁縫

師に仕立を頼むつてことにしなくちや嘘です」

〔あらくれ〕七十五

ここで「首を傾げて聴惚れていた」お島は、「今まで莫迦にしているこの男が、何か耳新しい特殊な智識を持つてゐる惻巧もの、やうに思へて」くる。それまで小野田とともに「商人とも職工ともつかぬ」あり方に満足していたお島が、「資本」の必要性を意識するようになる瞬間である。自作の「海軍将棋」を売り出そうともしている木村は「これが当ると、お上さんにもうんと資本を貸しますよ」と言うような投機的な人物で、その「色々の考案が頭脳あたたまのなかに渦のやうに描かれてゐる彼をお島は次第に好むようになる。やがて小野田との店が危機に陥ったお島は、「まさかの時には、多少の資本くらゐは引出せさうに思へてゐた浜屋」に会いに行くが、彼は既に事故でこの世を去つており、しかしお島が温泉地から木村を呼び寄せて再起しようとするところで物語は終わるのである。その意味でたしかにお島は大杉や関谷の言うように「資本」から排除されたまま終わるのだが、本作をお島が自らの無産者性を意識させられるとともに、「資本」の重要性に蒙を啓かれて行動を始めようとするまでの物語と読むことも可能ではないか。

なお内藤寿子（前掲）は本作を「戦争がもたらす経済システムの隙間を背景に実業へと乗りだした女性が、戦争とおなじく国内市場を活性化し彼女にも余得をもたらしもうひとつの制度、学校を発見することにより、〈生〉への欲望を叶える物語」であり

「一九一〇年代後半における女性の立志伝としてとらえることができる」と論じている。「もうひとつの制度、学校を発見する」とは、言うまでもなく小野田とお島が被服廠から学校へと洋服の請負先を切り替えることを意味しているが、内藤が言うように、お島の存在はたしかに連載紙『読売新聞』に掲載された「よみうり婦人付録」に描かれる労働婦人像と連続性がありつつ、この「資本」への過剰な関心ゆえにそれを超越している。また倉持亜希子（前掲）は、翻案作品『熱狂』（一九〇七年、祐文社）、短篇「里の女」（一九〇九年一〇月『文藝俱樂部』）の流れの上に「あらくれ」を位置づけ、秋聲の「女性の労働と搾取・自立の問題、そして主体の獲得」への継続的な関心を読み取っていた。明治期の作品であればこれらよりも膨大に書かれた家庭小説の方にその問題は表れていると言うべきだが、「あらくれ」がそのような問題意識の延長上にあったことはたしかである。さらに、この問題意識は「あらくれ」で完結するのではないことも重要である。すなわち本作に続いて同年中に『東京朝日新聞』に連載開始された新聞小説「奔流」の存在である。

五 「奔流」の「旧」と「資本」

こちら「奔流」の方では、「旧」と「資本」という言葉は「あらくれ」ほどあからさまに登場しない。しかしこの両者を結ぶ問題系は「資本」を相続できなかったお島と異なり、たしかに本作に継承され、作品の通奏低音となっている。「奔流」は没落士族の娘として生まれた照子が東京で実業家の愛人（妾）となって生

きる物語であるゆえに、「あらくれ」のような郊外の土着性とは無縁な都会を舞台にした小説に見える。しかし作品開始当初の照子は「北国のある都会に産れ」「可也の門地にあつたその家が零落してから、母親と二人東京へ出て来て」、「ある周旋屋の手」で十六歳の時に新橋で勤めに出了たとある。照子は婦人病で入院する「姉さん」の用達に病院に通ううちに、やがて「国の昵みで、その頃そこに医員をしてゐる」沢という男と知り合い、「以前自分の父親から、多少の恩を受けてゐる」十九銀行勤めの岩辻に取り次いでもらうことになる。母親が「あの人も旧を言へば、私達よりずっと格が下だつたのに」と嘆くように、本作もまた「あらくれ」と同様に「旧」に象徴される共同体が解体した以後の世界を描いているのである。

照子是新橋の家から出る前には山国のホテルに住み込んでおり、そこで知った二十四五の実業家の男に身請けされて神戸に行く寸前で「家庭の紛糾から可也な金を出して、家を飛出して来てゐた」その男から母によって取り戻される。この時に工面した「三四十円ばかりの其金」が彼女を花柳界に沈めるきっかけとなつたのだが、そこで母親から話られる「自分の体を何と思つてゐるんでせう。お金さへ出してくれ、ば、誰の言ふことでも聞いて、どこへでも行つてしまふ氣なんでせうか」という言葉は照子の半生をよく表現している。よって大杉重男（前掲「徳田秋聲のクリティカル・ポイント」）の言うように、「足迹」が「迷子」、「あらくれ」が「棄子」の物語だとすれば、本作を表現するのに適当なのは「貰い子」の物語ということにならう。「旧」とも

「資本」とも切れていることでどこにでも貰われてゆき、また自身の産んだ子供でさえもそれほど葛藤を感じぬかのように次々と本妻に引き渡すのが照子であるからだ。照子は岩辻とともに故郷の町に行き、岩辻家の墓に参つた際に「どんなにお金があつても、私はこんな土地に住みたいとは思はない」と吐露し「産故郷の此土地と、全く根の絶えてしまつたやうな自分の現在に、初めて打突つたやうな氣がした」と思う。この照子の姿には「旧」の世界である「産故郷」から離れデラシネとなつた近代人の姿が象徴されている。

照子母子は「子どもができれば、本宅の方へも自由に出入りができるし、家も一軒建て、くれるといつてゐるから」「それは然うだらうよ。あの人も一つはそれが目的だらうからね」という打算的な会話を交わすが、照子を実際に子どものいない本妻の松子に替わり出産を繰り返すことで自身の地位を確立してゆく。「その金の蓄積には、相応に暗い影も附絡つてゐるらしいのであるが、それは真の最初十年弱のことで、重に相場で当てたと見るのが、至当らしかつた」とされる岩辻の財産から、もし子どもが「岩辻の相続者になれば」、「左に右幾十万——ひよつとしたら百万近い財産が」自分の子のものである未来を照子は夢想する。この岩辻の「資本」についての「その金の蓄積には、相応に暗い影も附絡つてゐるらしい」という表現は「あらくれ」のお島の養家の財産の後ろ暗さに通ずるものがあるが、「それは真の最初十年弱のことで」と「暗い影」の存在を知覚しながらすぐに等閑に付されるのが前作との差異である。むしろここでは「町の人達へ金

を貸つたりして、夫婦は財産の殖えるのを楽んだ」というお島の養家と岩辻の職業との類似性が重要である。

以上のことを手がかりにしながら「奔流」の物語を追ってみよう。「旧」と言う言葉が再び話題になるのは、本宅に出入りしていた「松野といふ師匠」に岩辻がかなりの金銭を貸していたことがわかる場面で、「旧は相当の暮しをしてゐた松野の未亡人」の急場を岩辻が救つたことから、その娘の貞子が照子のライバルとして現れることになる。このとき照子は「少し法律のことさへわかれば、私にも出来さうだわ。そして取れたお金は、私が自分でよけておくのです」と言つて、銀行員でもある岩辻のような貸金業への好奇心を示すようになる。さらに照子に二人目の子が産まれ「それにつれて照子の生活もめき／＼膨張して」いき、そのうち岩辻が「下谷を根拠として、或年の選挙界に打つて出た」際には「四五万円も棄てる気なら、訳なく成功する」と豪語する岩辻に「四百や五百の投票なら、私にだつて取れないことはないと思ひますわ」と言い放ち、実際にその当選に照子は力を發揮することになる。この成功体験から照子は「私は何かかう多勢人を集めるやうな商売でもしてみたら、きつと成功すると思ふの」と事業への欲求が高まつてゆき、同時に新しい若い女が岩辻に現れてくる不安から「あれ以来振顧つてみやうとも思はなかつた色町の氣分に、ふと自分の今の遣瀬ない心持がしつくり合つてゐるやうな氣が」して「あの女たちの世界が、自分の今の境涯より、どんなに自由で面白いかわれない」とさへ考える。その後照子は岩辻に黙つて貯めておいた金を選挙活動で知り合つた商人・萩原の負債

にあてたことで、萩原との関係を深めてゆく。この萩原は現在の妻と一緒に前に「神戸の女隠居」から「商売の資本になるやうな纏まつた金を引き出して、東京へ出て」来た男であり、つまり彼もまた「資本」の後ろ暗さを背負つた人物なのである。やがて萩原との関係が岩辻に露呈して「自分の行手が急に暗い雲に封されてゐるやうな不安を感じる」照子だったが、同時に「長いあひだ望んでゐたやうな自由な生活が、そこに自分を待つてゐるやうな予想も湧いて」きて「放縦な生活の安易さが、その瞬間に、不可抗な自然の力で、退廃的な生活への誘惑を、彼女の心に逞しう」することになる。照子は萩原と別れざるを得なくなるが、岩辻がかえつて照子への執着を強くしたことで両者のパワーバランスに変化が生じることになる。

そこで照子は岩辻からの独立を画策することになるが、これは法律家の梅本と親しくなり、「三人もある子供を、悉く本妻の子として籍を入れておくなどは全く違法なんですから」という梅村の助言に背中を押されてのことであつた。そして岩辻が融資を断つた病院の医博士に自らが貯蓄していた大金を融資することで、自立の足がかりを得るのである。岩辻に梅村との仲を疑われた照子は債権証書などを持ち出し、最後は梅村が間に入つて三万円の財産分与で照子は独立、そして梅村の子と噂される四人目の子を妊娠するところで物語は終わる。ここでの照子の姿は、「資本」から排除され続けたことでその必要を痛感させられた「あらくれ」のお島に替わつて「資本」を獲得したかのように見える。そして照子が岩辻から得た金を少しづつ蓄積し、それを「資本」

としながら他者に貸すことで独立していくことは、後ろ暗い方法で「資本」を作つたらしい岩辻が銀行員や個人として金貸しを生涯としてきたこと、そして前述の「あらくれ」の養家が（その入手方法は不明だが）六部の金を「資本」に村のものに貸して大きくなったことと相似形を描いている。これは他者に金銭を貸し付けて利子を得る方法であることが要諦である。つまり、本作は労働を介した賃労働への対価として金銭を得るよりも、金銭そのものを増殖させる者が優位になった連載当時の日本社会を描写しているということである。

六 「奔流」から「通俗小説」へ

本作「奔流」が連載されたのは第一次世界大戦開戦の翌年であった。大戦景気の真ただ中であり、よって投機によって財産を作り金貸しをすることで銀行経営者から議員にまで上り詰める本作の岩辻の姿は、当時のいわゆる「成金」と重ね合わされながら読まれたことであろう。別稿で論じたが、秋聲は「奔流」発表の翌年に郷里金沢の豪商（廻船問屋）の生涯を描く「錢屋五兵衛」を金融機関の雑誌『日本勧業銀行月報』第一三一号～一三六号（一九一六年一月～六月）に連載し、さらにその翌年には実業家から男爵家の跡継ぎになる一方で女性を囲う「奔流」の岩辻の後継のような人物を登場させた「誘惑」（一九一七年二月一日～七月五日『大阪毎日新聞』）を発表している。その意味で、岩辻に對置される照子を「重工業の進展による産業革命の遂行を背景にして生まれていわれる私的ブルジョワジーの誕生を、その裏

側からみつめる役割」とした日高昭二（前掲「浮上する身体」）が、本作について「男の財力」が、その『家庭』の外部に、もう一つのいわば『私的』な領域を形成しているとすれば、ここでの女は、そうした男の場所を『奪う／欠ける』原理として鋭く読み換えている」とし「男によってその身体と子供を『奪われた』女は、それによっていま自分に何が『欠けているか』を知らされている」と論じたのは正しい。ただし「その子供の存在が開示する『奪う／欠ける』という領分を、差し当たって男の財力によって補填させようとしているのみか、その愛と性の領分においても『奪う／欠ける』原理を、あらたな男によって補おうとしている」と解釈するのはやや不十分ではないか。というのは、照子は常に男によって財を補填するのではなく、前節で確認したように最終的に自らが財を循環させ増殖させる方法を獲得する存在だからである。それによって照子は「財力」／「腕」のある女として出現しているのである。

時には岩辻と女のいる現場に果敢に踏み込んで男を厳しく問い詰め、梅村との関係を疑われた際には「人間は昔を忘れては駄目だよ」と岩辻に論される本作の照子は、「あらくれ」のお島の姿と重なり合う部分が多い。大杉重男が『「あらくれ」論』（前掲）でお島について指摘した「安易」への傾斜もまた照子には該当する。ただしお島の才覚が常にその場限りで「資本」を形成しえず、男性側も頼りない上に事業での失敗を繰り返すのに対し、岩辻は野放図な女性関係を目をつぶれば世俗的には極めて優秀で、また照子はそれ以上にしたたかである。照子は萩原との件でこそ

手痛い失敗を経験するが、むしろその経験を生かして自ら金貸しになり、岩辻から当座の「資本」を獲得して自立に成功するばかりか、四人目の子供を産むことで梅本との家庭をも獲得する。ここの照子は途中まで岩辻を内助するようにみせながら、岩辻の愛の対象が分散してきたと見るや、岩辻の手法を模倣することで自立を遂げている。言うなれば「奔流」は、労働力を再生産する場である家庭を舞台にしながら、「困い者」としてまさに子供を生産する役割に押し込められた女性がその家庭と資本の論理を逆手に取って成功を遂げる物語であり、また自らの身体を投げ出すしかない無産者として労働市場に登場した女性が美と知力によって金銭と法律を味方につけその身体を取り戻すまでの物語なのである。その意味で本作は、秋聲作品には珍しい読後に清々しさが残る小説ではある。さらに言えば、「あらくれ」と「奔流」を並べて読むと、「旧」は「資本」を得る側にいたはずのお島が「棄子」として俗世間に追放され、やがて資本を求めるようになり、照子がそれに替わって父なる者との闘争の末に資本を獲得するという、一種の貴種流離譚ともなっているのである。

とはいえ照子の新しい生活が安泰かどうかは全く保証がなく、また照子のここの成功は結局資本の論理を内面化しているがゆえに徹底して世俗的であり、「持たざる者」たちの奮闘を描いた「あらくれ」に対して、すでに「資本」を所有している「勝ち組」たちの内部闘争という感も強い。そしてそれが当時の秋聲の経済問題に対する思考の限界を示しているとも言えることもできよう。しかし少なくとも「あらくれ」から「奔流」に至る一九一五年の

二つの新聞小説が示しているのは、戦争が生んだバブルの中で、この作者が資本と家庭と女性の関係を考えようとしていたという事実である。その後の秋聲は本作「奔流」を最後に純文学的長篇から撤退し、大正期に勃興した「通俗小説」に本格的に乗り出してゆくことになる。そもそも「奔流」は名家のお家騒動という点で明治期の家庭小説に似ている側面があり、成金や選挙などの時事的話題を取り込んでいることや、その少々都合主義的な物語展開についても、少なからず通俗な性格がある。このような内容を純文学的な新聞小説として書くことに限界を感じたのかどうか、秋聲は一九一七（大正六）年以降、本作以上に現代風俗を存分に反映した通俗小説に活路を見いだしていき、その画期となったのが前掲の「誘惑」ということになる。

その意味で「奔流」は過渡期の作品ということになるが、資本の支配する世界で人間（特に女性）の生き様をいかに描くかという点に試行錯誤の過程が見えるというだけでなく、この秋聲の文学的関心を「足迹」以来の女物語の集大成である「あらくれ」以上に饒舌に物語っているがゆえに重要な作品である。いやむしろ「奔流」を通して見ることで、「あらくれ」のそのような性格も露わになると言うべきであろうか。いずれにせよ大正期の秋聲はそれまでの「純文学」にして新聞小説¹³を離脱して、同じ新聞を舞台にしなからジャーナリズムの発展によって現れた大衆読者を相手に、文字通り「資本」の原理と対峙する中で創作を行ってゆくことになるのであり、その厄介な試みの帰趨については今後の研究で明らかにしてゆきたい。

註

- (1) 一九九〇年頃までの本作の研究動向については中丸宣明「徳田秋声『あらくれ』」(一九九三年四月『解釈と鑑賞』)に詳しい。
- (2) 以上「徳田秋聲のクリティカル・ポイント」(紅野謙介・大木志門編『二世紀日本文学ガイドブック六 徳田秋聲』二〇一七年、ひつじ書房)より。
- (3) 引用は「解題」『徳田秋聲全集 第一巻』(前掲)より。
- (4) 「四名家第一印象」(一九三八年六月三日『東京日日新聞』)そのような両作を比較した論として木村東吉「『徴』と『道草』——そのリアリズムの特質と自意識の様相」(一九七七年一月『近代文学試論』)がある。また江藤淳にも両作の冒頭が「帰ってきた男」という共通性を持つという指摘がある(「徳田秋声」『日本の文学一〇 徳田秋声』(二)中央公論社、一九六六年)。実際秋聲の元に漱石の署名入りの『道草』の単行本が贈られていることも、(もちろん連載を依頼したための挨拶の意味であろうが)漱石から秋聲へのメッセージと受け取れないこともない。
- (6) 「解題」『秋聲傑作集』第二巻、一九二一年五月、新潮社
- (7) この所謂「お冬もの」のモデルについては野口富士男「『何処まで』の成立」(「徳田秋聲の文学」一九七九年、筑摩書房)の調査があるが本名さえわからずまだ不明な部分が多い。なお先行する大杉論への言及はないが、佐伯一麦による『あらくれ 新世帯』(岩波文庫、二〇二一年)の解説にも作中の水のイメージが言及されている。
- (9) 大塚によればこの「六部殺し」の説話は(差別や偏見等に関わる故に)婚姻差別などとして「あらくれ」の三十年後でも「現実」の一部を構成し得ていたとある。
<http://franzjoseph.blog134.fc2.com/blog-date-201906.html>
二〇二三年一月二三日閲覧
- (10) ただし大塚は漱石の物語が「私」を語り手とすることを重視し、「昔話」や「説話」とは異なる「私」と世界との関わりの物語として「書かれていることを評価しており、この「私」を語り手にしたことの画期性自体はあるのではないか。これによって「異人殺し」はたしかに「小説」になっていると思われるからである。
- (11) 「ミッシングリンク」としての「代作」——徳田秋聲の新出資料「銭屋五兵衛」の射程」(『立教大学日本文学』二〇二三年三月)
- (12) 秋聲のこの問題意識の行く末については拙著『徳田秋聲の昭和』(二〇一六年、立教大学出版会)の第十章「『経済小説』としての『縮図』」で論じたことがある。
- (13) 大杉重男「徳田秋聲のクリティカル・ポイント」(前掲)
- (14) ※徳田秋聲の引用は全て八木書店版『徳田秋聲全集』(一九九七年二〇〇六年)より行った。
(おおき・しもん 本学特任教授)
- (8)